

# 甲南女子大学における 小学校教員採用試験対策の取り組み

原 田 亮・相 澤 亮太郎

## The Preparation for the Elementary School Teacher Employment Examination in the Konan Women's University

HARADA Ryo and AIZAWA Ryotaro

**Abstract :** This is report about the methods, developed in the in the Konan Women's University, for preparing for the elementary school teacher employment examinations. The Department of Childhood Development and Education designed an elementary teacher-training curriculum in 2007. We organized a working group for the benefit of students to practice teaching skills and to prepare the exam. The working group holds a fundamental seminar, called "KYOSHOKU-JISSEN-KISO-ENSHUU", once a week for the students, from beginners to seniors, to practice teaching skills. During this seminar, incumbent elementary school teachers are sometimes invited as a guest, and the students are supposed to answer the questions set in the past teacher employment exams and also to take practice interview tests. In addition, both junior and senior students take voluntarily training sessions for the elementary school teacher employment exams. Preparing in advance for the exams is vital for the students who intend to take the exams. However, almost all the teaching staff is too busy with their routine works to help students, so, preparing for the exams is, in fact, a burden for each student which limits the amount of time to prepare for the teacher employment exams.

### 1. はじめに

甲南女子大学人間科学部総合子ども学科は、それまでの学部学科の精神を受け継ぐとともに、子どもに関わる現代的課題の解決に取り組む指導者としての資質・能力を養う新学科として、平成18年度に発足した。従来の学問領域を超えて、子どもの問題を総合的に学ぶ「学際的総合性」を理念として掲げ、乳幼児から児童期の保育及び教育の高度な専門家育成をめざし、学部・大学院の連携を強化したカリキュラムの確立に努めている。

開設初年度より保育士資格及び幼稚園教諭免許が取得できたが、発足1年後にあたる平成19年度になり、小学校教員を養成する課程が開設された。教員養成大学ではない、女子大における後発の小学校教員養成課

程というハンディを乗り越え、魅力ある小学校教員養成課程を運営し、実践力のある小学校教員を輩出するために、これまで本学科では、小学校教員を養成する具体的なプログラムを次々と創造してきた。本学科の小学校教員養成課程の特色は、学科教員による「小学校ワーキンググループ」（以後、小学校WG）が中心となって具体的な課題を検討し、学科会議を通じて他の教員と連携協力しながら、改善し、実践を重ねてきたところにある。その取り組みは、①本学科の教員養成理念の確立、②教員採用試験に合格する実力の養成、③教育実習システムの確立、④現場体験の充実、⑤大学卒業後の現職教員との連携、⑥教員養成に関する研究の推進等、多岐にわたるものである。その中でも、とりわけ②は、本学科における教育の成果が具体的な結果として示されることもあり、最も注力してきた取り組みの1つである。開設以後の5年間で、着実

に成果を上げるとともに、いくつかの課題も明らかになってきた。そこで本稿では、主に②に関連する取り組みを振り返りながら、その成果と課題を示し、今後の見通しに資する報告を行いたい。

## 2. 教職実践基礎演習

本学科では現在、保育士、幼稚園教諭、小学校教諭の 3 つの資格免許を取得することが可能である。しかし、小学校教員免許を取得し、小学校教員採用試験を受験する者の割合は、学科学生全体の 2 割に達しない。制度上、幼稚園での実習を行った上で小学校教員の免許を取得することも可能であり、また免許を取得しても小学校教員採用試験を受験しない学生も存在する。そのような状況にありながら、いかに学生の「小学校の先生になりたい」という動機を高め、小学校教員採用試験という高いハードルに挑戦させるかは、小学校課程の開設当初からの大きな課題であった。その課題を克服するための具体的な手立てとして、「教職実践基礎演習」を挙げることができる。小学校課程開設当初は、平成 22 年度入学生から教員免許の必修科目となった「教職実践演習」に接続することを前提に、小学校教員を目指す上での必要最小限の学びと実践の場として、教職実践基礎演習のカリキュラムが構想された。

当初設定された学年ごとの重点目標は、1 年は「教職基礎指導」、2 年は「教育ボランティア」、3 年は「教育実習直前指導」及び「実力向上指導」、4 年は「採用試験特別指導」であった。以下、年度ごとに計画された教職実践基礎演習の内容を大まかに示したい。

### (1) 平成 19 年度

小学校課程開設初年度の 1 年後期に教職実践基礎演習はスタートした。幼保小 3 つの資格免許を取得できる本学科 1 年生にとっては、自らの特性を判断し、保育実習や教育実習の方向性を確立すべき時期でもある。大学生活に慣れてきた 1 年後期というタイミングで、教師とは何かについて考え、小学校教員をめざす心構えや覚悟、小学校教員を選択するための動機付けを行うことを意図して計画された。具体的には、小学校教員の一日をシミュレーションや、近隣の小学校協力校を訪問し、学校現場でどのように指導が進められているのかを学ぶ機会を設けた他、授業記録ビデオを視聴し検討する活動を通じて、教師のやりがいと厳しさ、教師に求められているものなどについて理解を深める内容とした。

### (2) 平成 20 年度

1 年のカリキュラムに加え、2 年前期と後期の内容を検討し、推進することとなった。その際に留意した

表 1 甲南女子大学における小学校教員免許取得者に関連する数値の推移

入学年度	学科入学者数	小学校教員免許取得者数(見込み者含む)	小学校教育実習実施者数(見込み者含む)	小学校教員採用試験受験者数	公立小学校教員採用試験合格者数
平成 19 年度入学者	136 名	35 名	29 名	24 名	一次：10 名 二次：5 名
平成 20 年度入学者	127 名	39 名	25 名	16 名	一次：7 名 二次：3 名
平成 21 年度入学者	140 名	52 名	32 名	22 名	一次：16 名 二次：11 名
平成 22 年度入学者	136 名	35 名	29 名	未	未

表 2 教職実践基礎演習の当初構想案（平成 18 年度作成の検討資料を元に作成）

	2 年前期	3 年前期	4 年前期
	ボランティア体験、ボランティア報告会	一般教養、教職教養、小学校訪問、教材研究法、専門実技実習、模擬授業、現職教員による場面指導、	一般教養、教職教養、専門科目、論作文、模擬授業、場面指導、面接、集団討論、実技、
1 年後期	2 年後期	3 年後期	4 年後期
一般教職教養基礎、専門実技実習、小学校訪問、現職教員による講話	ボランティア体験、ボランティア報告会	一般教養、教職教養、専門科目、論作文、専門実技実習、模擬授業、場面指導、面接、集団討論、	教職実践演習

表3 平成19年度後期の教職実践基礎演習Ⅰの内容

1年後期	小学校教師をめざす、ある小学校教師の一日、漢字力を身につける、教師とは何かを考える、小学校の授業の実際と学習指導案、算数における教材の意味と教材作り、半日学校参観、「課題発見能力」の育成、今日的課題について、小学校課程希望者の決意と懇親、自主学習、教員採用試験の実施方法について、教員採用試験の内容について、まとめと感想
------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

ことは、学校現場を知ることを重点的に位置づけたことであった。具体的には、神戸市・芦屋市など近隣の小学校におけるボランティア体験を授業内容に組み入れた。ボランティア体験の実施に当たっては、教育実習に臨む時と同様の心構えが必要であると認識し、ガイダンスを行った。

表4 平成20年度の教職実践基礎演習の内容

1年前期	小学校教師をめざす、採用試験における国語の問題（漢字力）、各教科（算数、図工、理科、家庭科）の教育内容と教材研究、現代的な課題教育、小学校半日参観、小学校教師の仕事、受講者同士の情報交換、ようこそ先輩（合同）、採用試験に向けての受験勉強、ふりかえり
2年前期	ボランティア実習事前指導、小学校における先生方の動き、小学校におけるボランティア活動（10回程度）、ボランティア実習報告会
2年後期	ボランティア実習の充実、小学校におけるボランティア活動（10回程度）、受講者同士の情報交換、ようこそ先輩（合同）、ふりかえり

### (3) 平成21年度

この年度では、1年後期は教職基礎（教職への意欲、動機付け、希望者はボランティア）、2年前期は学校現場を知るボランティア、2年後期は教科系を中心とした指導力養成、3年前期は教育実習に役立つ指導力養成（実技を含む）、3年後期は採用試験対策と位置づけた。この年度になり、小学校課程の1期生である3年生からの小学校教員採用試験合格への強い願いを受け止め、採用試験に関して専門的に受験対策講座等を実施している東京アカデミーと連携し、希望者を対象に、学内で教採対策講座を受講できる取り組みを実施することとなった。こうした取り組みを軸としながら、3年から採用試験対策の勉強に本格的に取り組むこととなった。なお、この年度を通じて明らかになった課題は、①外部講師の確保、②水泳指導の実施（実施場所及び指導者の確保）等であった。

### (4) 平成22年度

平成19年度に開設された小学校課程の完成年度を

表5 平成21年度の教職実践基礎演習の内容

1年後期	小学校教師をめざす、採用試験における国語の問題（漢字力）、小学校教師の一日、現代的な教育課題、教科のイメージづくり（図工）、教育実習における場面对応の実例、算数の授業構想及び教科研究の必要性、採用試験に向けての受験勉強（算数）、小学校半日参観、受講者による情報交換（合同）、ようこそ先輩（合同）、採用試験における理科系の問題と勉強法、ふりかえり
2年前期	ボランティア事前実習指導、小学校における先生方の動き、小学校におけるボランティア活動（10回程度）、水泳指導の実際、ボランティア実習報告会
2年後期	各教科の教材研究法（国語、社会、算数、理科、図工、家庭科、体育）、受講者による情報交換会（合同）、ようこそ先輩（合同）、ふりかえり
3年前期	授業づくり（国語、算数、理科、音楽、生活、道徳、総合）、水泳指導の実際、実習生の一日子シミュレーション、ふりかえり
3年後期	個人面接指導、集団面接指導、小学校全科模擬試験と解答、教職教養模擬試験と解答、小論文、受講者同士の情報交換（合同）、ようこそ先輩（合同）、教育委員会人事担当者による講話、ふりかえり

迎え、それまでの教職実践基礎演習を振り返り、より実効性の高い内容となるよう計画した。具体的には、それまで2年次の教職実践基礎演習の枠内で実施していたボランティア体験を、教育実習のちょうど1年前にあたる2年次の9月に1週間続けて実施することとした。実習校において1年前にボランティア体験をすることで、実習校に対する緊張感を和らげ、より円滑に実習が実施できるようになることを狙いとした。この取り組みには、当然ながら実習校の理解と協力が求められるため、2年次に、大学からの教育実習に関する依頼文書を学生自身が実習校に持参する際に、1週間の学校ボランティア体験を学科長名で依頼することとした。幸い、これまでほとんどの学生が実習校での学校ボランティアを体験することができている。なお、この機会以外の学校ボランティア活動については、時間的な余裕がある3、4年次に積極的に取り組むよう指導することとした。また各学年を主に担当する教員を固定し、シラバス編成・成績評価・学生指導に責任を持つ体制を構築した。また1年より、ガイダンス等を通じて、小学校教員免許の取得を希望する学生には、教職実践基礎演習の受講を積極的に勧めることとした。2年次の教職実践基礎演習は、上述したようにボランティア体験を9月に移行させたため、同演習内ではDVD等の映像資料を活用しながら、実際の教材研究及び指導案作成の方法を学ぶことに重点を置いた。3年次は教育実習に向けて、実習時に役立つ指

導内容を取り込んだ。また 3 年生が取り組む指導案作成や模擬授業等について、実習を経験した 4 年生がアドバイスする機会を設けた。4 年次前期は採用試験の直前対策が中心で、東京アカデミーによる学内講座には含まれていない内容について個別指導を徹底するように配慮した。また前年同様、現場経験豊富な外部講師の指導が得られる機会を多く設けることを意識した。

表 6 平成 22 年度の教職実践基礎演習の内容

1 年後期	小学校教師をめざす、小学校教師の 1 日、小学校における現代的な課題（危機管理、人権、国際、食、性）、小学校教師の課題（子ども理解、教科指導、学級経営）、小学校の一日（授業参観）、教育実習体験を後輩に伝える会、ようこそ先輩（合同）、教採合格者による合格への道（合同）、採用試験受験勉強、ふりかえり
2 年前期	DVD 映像を用いた教材研究法（国語、社会、音楽、理科、図工、家庭科、体育、道徳）、特別支援教育の実践（合同）、現場教師による教科指導実践報告（外部講師・合同）、水泳指導の実践（合同）、9 月のボランティア体験について、ふりかえり
2 年後期	授業づくり（道徳、国語、生活）、教材研究法と授業づくり（総合）、教育実習体験を後輩に伝える会、ようこそ先輩（合同）、教採合格者による合格への道（合同）、ふりかえり
3 年前期	指導案作り（国語、社会、算数、理科、図工）、授業づくり（総合）、特別支援教育の実践（外部講師・合同）、現場教師による教科指導実践報告（外部講師・合同）、水泳指導の実践（合同）、教育実習生の一日、ふりかえり
3 年後期	採用試験対策（国語、算数、理科）、小論文、現場教師による教科指導実践報告（外部講師・合同）、教育実習体験を後輩に伝える会、ようこそ先輩（合同）、望まれる教師像（外部講師・合同）、教採合格者による合格への道（合同）、ふりかえり
4 年前期	集団面接及び集団討論指導、ロールプレー、模擬授業、特別支援教育の実践（外部講師・合同）、論作文指導、過去問題解説と練習問題、現場教師による教科指導実践報告（外部講師・合同）、個人面接指導、教育実習生の一日（3 年生へのアドバイス）、水泳指導の実践（合同）、ふりかえり

この年度は、小学校課程の 1 期生たちが教員採用試験を受験した年であった。卒業前に、採用試験を受験した 1 期生へのアンケートから浮かび上がるのは、3 年次の教育実習の後、迷いがある中で教員採用試験受験を決意し、教職実践基礎演習や春休みの勉強会等を通じて、筆記や面接、模擬授業対策の必要性を感じて必死に取り組んできた姿である。なお、春休み勉強会については、後述する。

表 7 小学校課程 1 期生への教員採用試験受験に関するアンケート（抜粋）

<p><b>Q：小学校教員採用試験を受験しようと思ったのはいつですか？</b> 教育実習に行くまでに決心していた・・・7 名、教育実習中及び事後指導（合宿）を通して決心した・・・5 名、4 年生になって決心した・・・5 名</p>
<p><b>Q：小学校教員採用試験を受験して、自分に足りないものがあつたとすれば何か？（複数回答）</b> 基礎的な学力対策・・・9 名、面接や模擬授業対策・・・9 名、実技試験対策・・・3 名、受験自治体に対する対策・・・3 名、その他（努力・意欲）・・・2 名</p>
<p><b>Q：大学における小学校採用試験対策として、自分にとって有効だったものは何ですか？（複数回答）</b> 春休みの勉強会・・・11 名、採用試験前後の勉強会・・・11 名、4 年前期の教職実践基礎演習・・・8 名、3 年後期の教職実践基礎演習・・・4 名、その他（東京アカデミー等）・・・2 名</p>

※平成 22 年度夏に採用試験を受験した 23 名中 17 名から回答を得た。

## (5) 平成 23 年度

この年度は、前年度に確立した教職実習基礎演習のシラバスを大きく変更することはなかったが、採用試験を目指した勉強はより早くから始める方が効果的であることを踏まえ、新 1 年及び 2 年への進級時に実施される教員免許取得希望者へのガイダンスにおいて、「小学校教員のやりがいと楽しさ」「小学校教員になるための採用試験突破の必要性」「本学科では、小学校教員をめざす学生を対象に 4 年間の計画的な指導（教職実践基礎演習）を行っていること」等を強調して説明を行った。

## (6) 教職実践基礎演習の合同実施

教職実践基礎演習を 1 年生から継続して受講することで、採用試験を目指す者同士の結束が強まり、学生同士が支え合いながら合格を目指すことを強く意図してきた。その上で、採用試験を目指す学生の縦のつながりも大切にすることを願い、各学年の教職実践基礎演習を合同開催する機会を積極的に設けてきた。具体的には、①ゲストティーチャーによる指導、②教育実習体験を後輩に伝える会、③教採合格者による合格への道である。②は、平成 19 年度と 20 年度に「受講者同士の情報交換」として行っていた内容を変更したものである。

①ゲストティーチャーとして、現役の若手教師を招聘することを重視した。学生にとって年齢の近い若手教師の話を聞くことは、自分の将来像に具体性を持たせ、教師を目指す動機を高めることにつながる。小学校教員として勤務する本学卒業生や近隣小学校の若手

教員に、教員を志望した理由や採用試験対策、日々の勤務状況や校務分掌等について話してもらうことは、小学校教師を目指す学生にとって大きな刺激となっており、講義後には「こうした話をもっと聞かせてほしい」「今までで一番身に入る講義だった」との受講者からの感想が寄せられている。

②「教育実習体験を後輩に伝える会」は、1期生が3年での教育実習を終えた平成21年度後期にはじめて実施された。1年から3年の受講生を4つのグループに分け、少人数の中で、実習を体験した先輩に対して、直接さまざまな質問をすることが出来る場を設けた。内容については3年生がすべて計画し、進行や発表、資料準備もグループごとに担当者を決めて行った。実習までに準備しておくことや持って行くもの、実習中の心がけ、実習記録の書き方や工夫など、多岐にわたる内容に対して、1,2年生からも積極的な質問が出された。この会は、翌年度以降も継続して開催されるようになっている。

③「採用試験合格への道」は、1年から4年までの教職実践基礎演習受講者が一堂に会し、その年度に現役で小学校教員採用試験に合格した学生が、自らの受験勉強体験を後輩たちに語ることを目的としている。自治体により試験対策の内容が異なるため、その年に受験した各自治体の試験内容（筆記試験以外の内容として、個人面接、集団面接、実技試験、模擬授業、場面対応など）を資料としてまとめ、当日参加者に配布している。試験内容以外には、自身の受験勉強の方法や役だった参考書、気分転換の方法等を紹介している。同じ学科の身近な先輩が、いつ頃から採用試験を目指し、どのように勉強し、当日はどのような気持ちで臨んだのか等、合格への道は決して平坦なものではなかったことを後輩たちが直接知ることができる内容となっている。教職実践基礎演習の枠組みを利用しながら、違う学年の学生同士が交流することによって、教職を目指す学生が自身のロールモデルを獲得し、自らを高めようと決意を新たにできる機会を設けることを重視してきた。

#### (7) 教採受験希望者の組織化

本学科の教員養成課程においては、幼稚園及び小学校いずれの教員免許も取得することができる。そのため、3年次での実習に取り組む1年前にあたる2年次の春には、小学校で実習を行うのか、幼稚園で実習を行うのか、いずれかを選択する必要がある。当初は、小学校での実習を希望する学生だけが1年後期からの

教職実践基礎演習を受講するものと位置づけていたが、その中から、2年生になってから幼稚園での実習を希望する学生が現れた。その結果、教職実践基礎演習を受講する学生集団が、必ずしも「小学校教員を目指す学生の集まり」ではなくなってきたのである。小学校教員を目指す学生同士の人間関係を築く機会としては、週に1回の教職実践基礎演習だけでは不十分であるとの認識も高まってきた。

子どもに関わる諸課題を総合的に学ぶことを本旨とした本学科では、コース制等、希望する資格免許や校種ごとに学生を振り分ける仕組みは存在しない。しかし、年々厳しくなる小学校現場の現状や、受験勉強を経験せずに本学に入学する学生が少なくない中で採用試験に挑まねばならないという現実を考えると、少しでも早く共通の目標を持つ学生を組織化し、動機付けを行い、学生同士が支え合い、切磋琢磨する人間関係を築きながら準備を進める、という考えは当然のものである。個人レベルで継続的な学習を続けることは難しく、採用試験に合格する学生を育てる上では、学生の組織化は極めて重要な課題である。そこで、学科全体の理解と協力を得ながら、教職実践基礎演習とは別に、2年次の基礎ゼミの枠を利用して、小学校現場での授業観察や授業検討会を行ったほか、小学校現場での諸課題についてディスカッションを行う取り組みや採用試験対策の勉強会等を実施することとした。小学校教員を志望する学生は、1年次からの教職実践基礎演習と基礎ゼミの枠組みを通じて、同じ目標を目指す学生同士の仲間意識を高め、切磋琢磨する人間関係を構築することが可能となった。

### 3. 教採勉強会の運営

#### (1) 夏期の自主勉強会の立ち上げ

本学科の小学校教員養成課程の1期生たちが3年生となった平成21年度の夏期休業期間に、最初の自主勉強会がスタートした。教育実習を目前に不安を募らせた1期生から、自分たちが行う模擬授業に対して、本学科教員に指導してほしいとの要望が寄せられた。教育実習における事前指導において、教科ごとの学習指導案の書き方等は学んでいるものの、学年、教科書等は実習校ごとに異なる中で、実際の教材をもとに学習指導案を書き上げ、教室場면을想定して授業をしたい、との要望であった。1期生からの要望について小学校WG内で話し合った結果、「夏期休業中は保育実習等の訪問指導も多いが、9月から教育実習に臨もう

とする学生の不安を少しでも取り除けるように協力していこう」という結論に至った。勉強会は、国語、算数、社会、理科、音楽、道徳などについて、午前 2 時間、午後 2 時間のスケジュールで計 4 日間計画され、学生は参加者を募り、模擬授業の担当者を割り振った。教員側は教室の確保を引き受け、各時間に 1~2 名の教員が指導者として参加した。先輩がいないという 1 期生の不安が、こうした自主的な取り組みを呼び起こしたと言える。

## (2) 春休み勉強会

1 期生たちが 3 年次の教育実習を終え、11 月には事後実習を合宿形式で行った。実習を終えて、教員採用試験がいよいよ目の前のものという認識を持つようになった 1 期生たちは、事後実習合宿を通じて、「自分は小学校の先生になりたい」との強い願いを共有するようになった。そこで 1 期生たちは、実習前の夏期勉強会の経験を生かして、春休み勉強会を企画した。内容は、採用試験に向けた勉強方法に関するレクチャーや自己分析・自己 PR の検討に始まり、集団面接、集団討議、論作文、実技対策、個人面接、模擬授業、場面对応に至るまで、人物試験に関する内容を網羅する形で計画され、小学校 WG メンバーを中心とした学科教員が指導を引き受けた。平成 21 年度には、1 日 3 コマを基本とし、計 8 日間実施した。計 23 名の参加申し込みがあったが、少人数指導を基本とするため、受講希望者を 2 グループに分け、1 グループに 10 名前後の学生に対して、常に 1~2 名の教員が指導にあたる体制を用意した。この春休み勉強会は、現在に至るまで、毎年、3 年後期の春休みに学生たちが企画している。

表 8 平成 23 年度春休み勉強会のスケジュール

2/10	①開講式、勉強への構え・決意、②自己分析、自己 PR、自分の性格、③論作文
2/13	①集団面接、②自習、③集団討議
2/17	①②小学校での研究発表会参観、③研究発表会の振り返り
2/20	①個人面接、②論作文、③集団討議
2/24	①模擬授業、②集団面接、③場面对応
2/27	①個人面接、②集団討議、③場面对応
3/2	①実技指導（音楽・体育）、③模擬授業
3/5	①模擬授業、②場面对応、③先輩の体験談
3/9	①模擬授業、②個人面接、③場面对応
3/12	①模擬授業、②個人面接、③集団面接
3/16	①論作文、②個人面接、③閉講式

※①は 1 限目、②は 2 限目、③は 3 限目を示している。

表 9 春休み勉強会の参加者数等の推移

	申込者数	勉強会日数	コマ数	延べ教員数 <sup>1)</sup>
平成21年度	23 名	8 日	23 コマ	54 名
平成22年度	17 名	10 日	30 コマ	108 名
平成23年度 <sup>2)</sup>	22 名	11 日	33 コマ	98 名

<sup>1)</sup>1 コマを担当した 1 名の教員を 1 としてカウントし、期間全体の合計を「延べ教員数」としている。

<sup>2)</sup>平成 23 年度の春休み勉強会には、公立幼保の採用試験受験を希望する学生が上記とは別に 37 名が参加を申込み、多くの教員の協力を得ながら独自のプログラムでの勉強会が開催された。

以下は、1 期生が企画した平成 21 年度春休み勉強会の内容を記録した冊子『わたしたち、小学校の先生になることを誓います。』に掲載された、参加学生による文章の一部を抜粋したものである。

————— 基礎的な学力や、指導力を身につけることはもちろんであるが、自分をやる気にするためにはどうしたらよいかといった動機付け（外発的なものと内発的なものを適時使い分けること）、自分の言いたいことをどのように表現すると相手に伝わるのかという人との関わり方（表現方法の選択や自他尊重の気持ち）など、今、身をもって体験し実践を繰り返すことで、教師になってから子どもたちを指導していくことや子どもたちに手本となる姿を示していくことが可能になるのではないだろうか。恥ずかしながら、私自身そのことに気付いたのは月曜 5 限の教職実践基礎演習という講義内で、実感したのは教育実習中であり最近のことである。つまりこのことから分かるのは、大学での前期後期で行われる通常の講義（教科・領域・時間に関する講義／教育原理・教育心理・教育史・教育法規を取り扱う講義）を 1 回生の内から、いかにモチベーションを高く持ち続け、全力で取り組むかということが大切だということである。また、そこでの学びを総合的に発揮する場面（教職実践基礎演習・教育実習など）を有効活用し、そのときの自分の実力を最大限に出し、PDCA を繰り返し自信につなげていくことができるかどうかということが重要となってくるのである。—————

1 年生からの講義内容の学習を基礎としながら、教育実習やボランティア体験、そして教職実践基礎演習や教採勉強会を積み重ねながら、教師になろうという動機や実力を高め、人間的にも成長していく学生の姿を見て取ることができる。

#### 4. 4年生の直前指導

4年生の指導は、夏の採用試験に直結するものばかりである。小学校WGに参加する教員のうち、4年生の教職実践基礎演習を担当する教員が主となって、4年ゼミ担当教員と連携しつつ、直前指導にあたってきた。具体的には、大学推薦者の決定、受験自治体の決定、自治体ごとの書類指導、一次試験に向けての個別指導、一次試験合格者への二次試験対策特訓（夏休み中の指導）等である。

##### (1) 大学推薦者の決定

大学推薦枠のある自治体は、近畿では京都府及び京都市だけであり、他は関東地区に集中している。地元出身者の多い女子大学であるだけに、関東地域に進出することに抵抗を感じる学生や家庭が多い。平成22年度は、推薦枠の活用を図るために京都市・京都府・横浜市・東京都に、それぞれ1名ずつ、計4名を推薦したが、結果は京都市の1名だけが二次合格を果たした。平成23年度からは推薦基準として学業成績、面接力、教職実践基礎演習への出席率、自身の出身地域か否か等を総合的に勘案した上で、自ら申し出た学生を推薦することとした。その結果、横浜市と京都府に2名を推薦し、横浜市の1名が二次合格した。平成24年度は京都府に2名の申し出があり、上述の基準に照らし合わせて2名を推薦し、1名が合格した。

##### (2) 受験自治体の決定

小学校教員採用試験において、誰がどの自治体を受験するのかについては、全く個人的な事柄であるが、大学による進路指導という観点から、受験する自治体を把握し、指導や助言を行ってきた。1期生が採用試験を受験した22年度には、「親に受けるよう言われたので、大学には相談せず受験した」と事後報告する学生も見られたが、大学としての責任を果たすためにも、極力、どの学生がどの自治体を受験するのかについては把握するように心がけてきた。東京アカデミーによる教採講座の受講者は模試を受験しているため、模試の結果等もふまえながら、受験自治体に関する個別指導を行っている。また可否の結果などに関する確実な情報を把握するため、「受験者氏名・受験自治体・受験番号・一次試験の日程・一次試験の結果発表日・二次試験の日程・二次試験結果発表日」等を個別の調査票に記入し、提出するよう指導している。こうし

た取り組みを重ねておくことで、仮に不合格だった場合も、臨時講師としての講師登録に関する相談や指導、講師採用されるための働きかけのための資料として活用することができる。

##### (3) 自治体ごとの書類指導

採用試験にかかる書類は自治体ごとに様々である。受験を直前に控えた学生たちは、昼休みや講義がない時間に教職実践基礎演習4年担当の教員研究室を訪れ、書類の書き方や内容について質問をしてくる。教員は、基本的な様式やサンプルを用意し、参考にさせるとともに、自己PRの書き方についての指導も行うようにしている。本学では、地元の兵庫県と神戸市については受験者が多いため、大学で一括して申し込みを行っている。その際、書類の不備の発見や修正箇所の指摘を徹底するようにしている。

##### (4) 一次試験に向けての個別指導

近年の教員採用試験においては、従来以上に人物重視の傾向が見られ、一次試験に個別面接や集団討議を行う自治体が少なくない。受験を希望する学生の中には、教職実践基礎演習の時間外にも、個人で又はグループで面接指導の希望を申し出る者も多い。事前に面接希望の日程を相談し、徹底した個別の面接練習を行うとともに、面接練習をしながら、受験勉強の悩みやモチベーションの低下に対するカウンセリングの指導へと展開する場合もある。ただし、通常の研究業務の傍らで、ひっきりなしに相談や練習に訪れる学生への個別対応に限界を感じる場面も少なくない。

##### (5) 一次試験合格者への二次試験対策特訓（夏休み中の指導）

一次合格発表は自治体によって様々である。大学推薦によって一次通過が早々に決定している場合もあれば、堺市のように一次と二次で受験者を段階的に絞り込むことなく試験を実施する自治体もある。二次試験が早い自治体は8月初旬に実施される一方で、鳥取県のように8月末から9月初旬に二次試験が始まる自治体もある。

二次試験対策においても、自治体ごとの個別の対応が必要であり、夏休み期間中に多くの時間を割かざるを得ない。二次試験の内容は自治体ごとに異なり、模擬授業や個人面接、実技試験の内容にも違いがあるため、個々の受験自治体に応じた二次対策特訓が必要となる。面接官役となる教員は、学生がどのような状況

にも対応できるよう、論理的な受け答えになっていない場合や、具体性の伴わない発言には、厳しく問い返ししながら指導することを意識している。平成 24 年度夏の特訓は、各日程とも午前は 10:00～12:00、午後は 13:00～15:00 の 2 時間ずつとし、常に 2 名から 3 名の教員が指導にあたる体制を整えた。会場は、基本的には学内の空き教室やピアノ室、体育館等を使用した。大学が全学休業期間となる 8/7～8/17 は、協力小学校の厚意により教室を使わせて頂いた。内容は、個人面接、模擬授業、場面对応、実技対策（体育・音楽）、小論文、エントリーシート作成等、参加者の受験条件に合わせた計画を作成して実施した。以下、平成 24 年度の二次対策特訓の概要を示す。

表 10 平成 24 年度夏に実施した二次試験対策特訓の概要

日数	コマ数 <sup>1)</sup>	参加学生数 (のべ) <sup>2)</sup>	指導教員数 (のべ) <sup>3)</sup>
15 日	28 コマ	76 名	63 名

<sup>1)</sup>1 コマあたり実質 2 時間であり、午前は 10 時～12 時、午後は 1 時～3 時とした。

<sup>2)</sup>午前午後と通して参加するため、1 日ごとの出席者数を合算した。

<sup>3)</sup>1 コマあたりの指導に当たった教員数を合算した。

こうした二次試験対策の勉強会を通じて、学生相互の連携や信頼関係もさらに深まっていった。互いの勉強方法について情報交換をしたり、面接の受け答えについて相互評価を行ったり、面接官の立場に立って質問をしたりと、春休みの勉強会では見られなかったような姿が見られ、試験を目前にして飛躍的に実力を伸ばしている様子であった。仲間の良い点は真似るとともに、自分の話し方の癖や特徴に対する指摘は謙虚に受け止め、相互に向上させる意識が生み出された。

## 5. 東京アカデミーによる学内講座

1 期生が 3 年生となった平成 21 年度より、筆記試験対策に重点を置いた教採対策講座として、東京アカデミーによる学内講座を実施している。教員採用試験における筆記試験は、高校受験、大学受験において出題される内容と重複する部分も多く、大学入学までの基礎的な学力の差が、筆記試験に合格できるか否かの差として現れる。教職実践基礎演習や自主勉強会を通じて面接等の人物試験対策に力を入れたとしても、筆記試験に自信を持って取り組むためには、早い段階からの継続的かつ効率的な学習の積み上げ重要となる。以下、21 年度以降の受講者数の推移を示す。講座の

内容は、小学校教員採用試験のみならず、公立幼稚園や公立保育園の採用試験の内容に対応したものや、中学校や高校教員、養護教諭の採用試験の内容にも共通する内容で実施されるため、他学科を含む多くの学生が参加している。受講者には受講料の負担が別途必要であるが、大学からの補助を行うことで、より多くの学生に受講を促し、筆記試験対策の準備に取り組ませてきた。

表 11 東京アカデミーによる教採対策講座の受講者数の推移

	全受講者数	小学校対策コース受講者数	その他（幼保、中高・養護、2 年生含む）
平成 21 年度	14 名	9 名	5 名
平成 22 年度	31 名	8 名	23 名
平成 23 年度	70 名	25 名	45 名

## 6. おわりに

ここまで、総合子ども学科における小学校教員養成課程の特色の一つとも言える教職実践基礎演習と教員採用試験対策の取り組みについて主に報告した。教員採用試験に合格するための基礎学力向上には、1, 2 年次から時間をかけて筆記試験対策に取り組んでいくことが肝要であることは言うまでもない。それに加えて、本学科では、教職実践基礎演習や自主勉強会等を通じて、教師を目指そうという動機付けや、支え合いながら研鑽を重ねる学生同士の人間関係作り、教師としての実践力の向上、そして採用試験直前対策に取り組んできた。その内容の多くは、後発の女子大における小規模な教員養成課程であることの特長を生かし、学生からの要望や採用試験に関連するニーズに対して、迅速かつ、きめ細かく対応する中で生み出されてきたものである。その点では、学生たちの熱意と、それに真摯に応えて取り組んできた教員が共に作り上げてきた成果であるとも言える。

しかし、きめ細かく熱心な指導を続けることには限界もある。自主勉強会や直前特訓での指導、そして日常的な個別指導は、基本的に各教員の厚意による個人的な無償奉仕として行われている。この点に関して小学校 WG は、学科会議を通じて、「教職志望の学生を支援する体制づくり」について何度も要望をあげてきた。とりわけ採用試験が始まる 7 月以降、総合子ども学科の教員は毎年一人あたり 15 件から 20 件程度の実習訪問を担当しており、その合間を調整しながら採用試験の直前指導や個別指導、教育実習前の自主勉強会の



指導を行っている。また春休み勉強会も、多くの教員の熱意や厚意によって、計 30 コマ以上の時間をかけた少人数指導を実現することができている。いずれも「教職を志望する学生のために」ということで無償の協力を得てきたが、今後この状況を維持できる保障はどこにもない。教職に関する日常的な相談の窓口となりながら、採用試験に向けて、きめ細かく息の長い支援に取り組むことができる体制づくりは、本学科の教職課程を充実させる上で喫緊の課題であると言える。具体的な方法や組織案については今後を重ねる必要があるが、教員個人の厚意と努力のみに依存した現状か

らは早急な脱却が求められる。

本報告では、教採対策という視点から、教職実践基礎演習と自主勉強会を主に取り上げてきた。採用試験に合格することは教職課程を担う本学科にとって大きな課題であるものの、「実践力のある小学校教員の輩出」という点においては、本報告で取り上げた項目以外にも注目すべき点が多々ある。教員養成のためのカリキュラム全体の構成や個々の授業におけるさまざまな特色や工夫、教育実習に関するさまざまな取り組み等については、稿を新たにして報告したい。